

I 研究主題

思いを伝え合う子どもの育成 ～英語によるコミュニケーション活動の工夫を通して～

II 研究主題設定の理由

1 教育の今日的課題から

子どもたちを取り巻く環境は急速に進展し、社会全体の国際化やグローバル化が加速してきている。新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学びの実現」が求められ、その中で「何ができるようになるか」が明確化された。異なる文化との共存や国際協力が必要とされる中で、自分の感情や思いを表現したり、他者のそれを受け止めたりする、コミュニケーションを図ろうとする態度を育成することが大切になってきている。これらを受けて、文部科学省は、中学年に外国語活動導入、高学年に外国語教科化の実施計画を示し、本年度から移行措置が始まった。学校においては、平成32年度からの小学校英語の教科化等を見据えた取組の推進が必要とされている。

2 甲佐町の方針及び本校教育目標から

甲佐町の教育大綱には、社会の変化に対応した教育の推進の中に「英語教育の充実」が示されている。そこで今年度は、低学年9時間、中学年35時間、高学年70時間を設定し、外国語の先行実施を行っていくことになった。

本校の学校教育目標は、「未来を切り拓く挑戦力の育成～なかよく かしこく たくましい 白旗の子～」となっている。また、「よく気付き、深く考え進んで学ぶ児童」がめざす児童の姿の一つである。本研究では、外国語活動を中心に据え、人とかかわりあう活動を工夫した授業や日常活動の充実を図ることで、自分の思いを伝えることができる子どもを育むことをねらいとしている。子どもが夢を実現していくためには、コミュニケーション能力は必要不可欠であり、本研究は本校教育目標の具現化に大きく資することだと考える。

3 児童の実態から

児童の意識調査の結果から、昨年度からの取組で外国語の授業を楽しみ、英語を話せるようになりたい感じている児童が9割以上で関心も高い。しかし、英語を話したり聞いたりすることへの抵抗感や中学校での英語学習への不安を感じている児童もいる。さらに、他国文化への興味を示している児童は増加したが、他国文化も自国文化と同じように大切に感じている児童はまだ少ない。他国文化に対して視野を広げる取組を工夫していく必要がある。

以上のことから、児童に英語を使ってコミュニケーションを図ることの楽しさを味わわせ、

思いを伝え合える児童を育てていくために、目的意識を持って、人とかかわりあう活動を工夫した授業や、外国語に慣れ親しむための日常活動の充実などについて研究を深める必要があると考える。

4 主題について

「思いを伝え合う子ども」とは
 活気にあふれ、自らすすんで自分の周りの人たちとかかわりあう児童と捉える。相手が伝えたいことを分かろうと努力して聞こうとする態度、相手に分かってもらえるように工夫して伝えようとする態度と捉える。

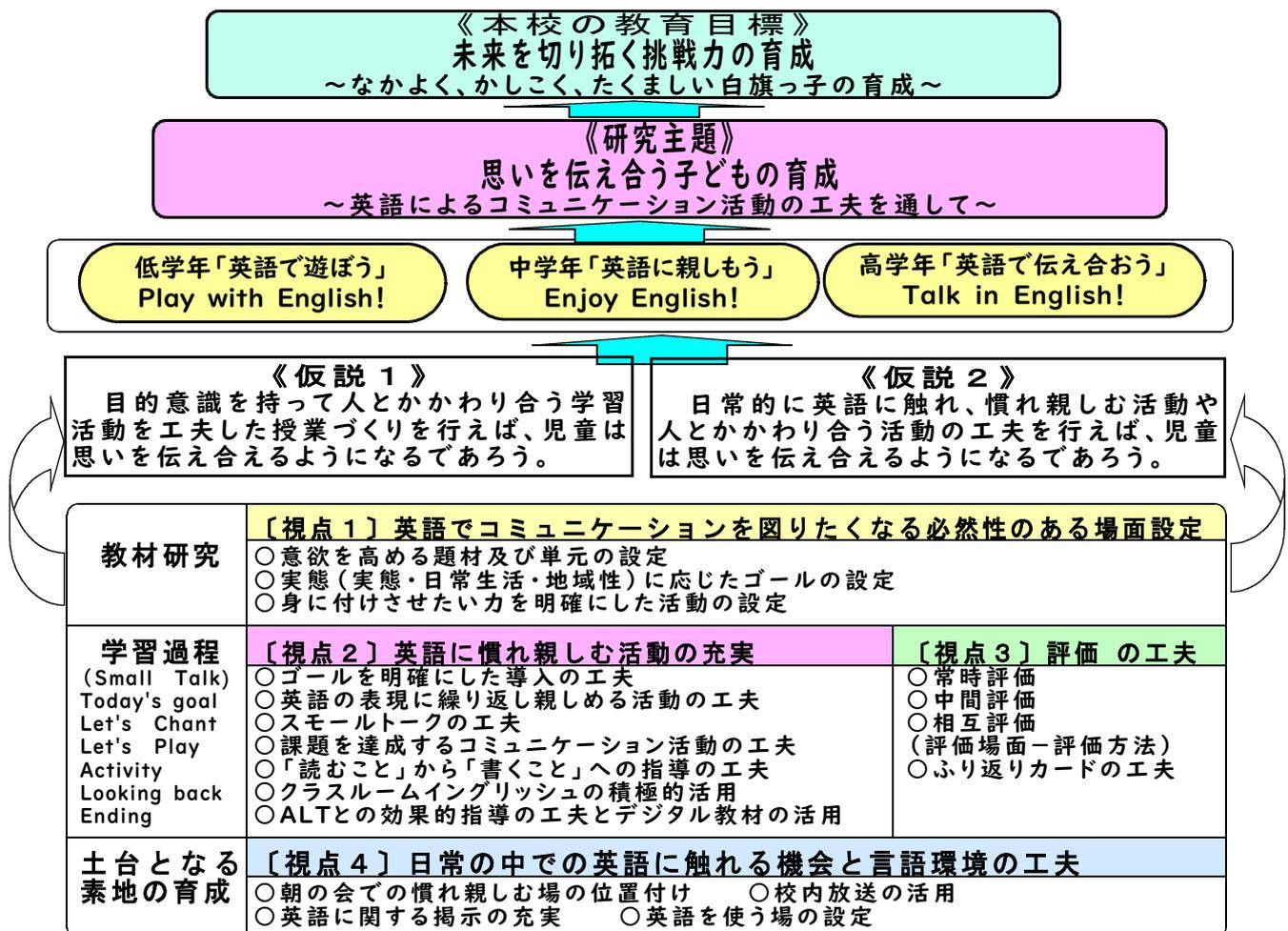
Ⅲ 研究の構想

1 研究の仮説について

本校は、以下のような仮説を設定した。

- 仮説 1** 目的意識を持って人とかかわり合う学習活動を工夫した授業づくりを行えば、児童は思いを伝え合えるようになるであろう。
- 仮説 2** 日常的に英語に触れ、慣れ親しむ活動や人とかかわり合う活動の工夫を行えば、児童は思いを伝え合えるようになるであろう。

2 研究構想図について



IV 研究の方法

1 視点1「英語でコミュニケーションを図りたくなる必然性のある場面設定」

(1) 意欲を高める題材及び単元の設定

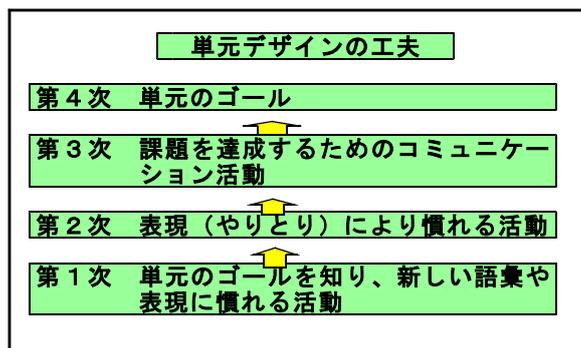
児童の実態に応じて、コミュニケーション活動の目的意識や必要感を持つことができるような題材を考え、単元のゴールとして設定することにした。低学年は「英語で遊ぼう Play with English!」、中学年は「英語に親しもう Enjoy English!」、高学年は「英語で伝えよう Talk in English!」をめざし実践に取り組んだ。学年が上がるにつれて、「楽しむ」から「思考しながら」コミュニケーションが図れるような場面設定を考えていくことにした。

(2) 実態に応じたゴールの設定

児童が「知りたい! 伝えたい!」と意欲的にコミュニケーションを図るために、児童の実態、日常生活、地域の特徴に合わせた単元のゴールを設定した。児童の学年や発達段階や興味関心、新たな発見があり伝えたい内容、相手意識等を考慮して取り組んでいくことにした。

(3) 身に付けさせたい力を明確にした活動の設定

児童が、目的・場面・状況に応じて、自分の考えや思い(伝えたい内容)、表現(伝えるための表現)を選んでコミュニケーションを図れるようになるために、年間指導計画を系統的に位置付け使える力を身に付けられるようにした。



【資料① 単元デザイン】

そのために、単元全体を見通した単元デザインを工夫

した。単元のゴールにおける児童のめざす姿をイメージし、「付けたい力」のために「どのような活動」を「どのような順序、方法」で指導すればよいかを明確にした上で単元計画を立てていくことにした(資料①)。

2 視点2「英語に慣れ親しむ活動の充実」

(1) ゴールを明確にした導入の工夫

児童が単元のゴールを常に意識し、"Warming up"の中で既習事項のチャンツを行い、本時は何が知りたいのか何を伝えたいのかを明確にできるような導入の工夫を行うことにした。

(2) 英語の表現に繰り返し親しめる活動の工夫

チャンツとゲームを活用する。ALT やデジタル教材の音声を聞いて慣れ、さらにチャンツを通してまねして慣れ、次にゲームを通して表現ややりとりに慣れ、Activity で対話して慣れる単元デザインを計画する。チャンツは ALT の意見を参考にし、リズムボックス等を活用して、英語特有のリズムに合わせて、アクセントの位置を楽器や手拍子で強調するなどの工夫をする。また、語彙、表現、疑問文と反応表現、さらにリアクションを加えるなど実際のやりとりで活用できるチャンツ（資料②）へと広げていく。ゲームの特性について「ア

What do you want ?
"P" card, please.
Here you are.
Thank you.

【資料② チャンツの工夫】

聞く」「イ 繰り返し言い、音に慣れる」「ウ 記憶したり自分のものにする」の3つに分類した。また、低、中、高学年の発達段階に応じて単元で扱うゲームも選定していくことにした。

(3) スモールトークの工夫

次の二つをねらいとして中学年からスモールトークを取り入れことにした。「ア 既習表現を繰り返し使用して定着」「イ 対話を続けるための基本的な表現の定着」とし、学年に応じて計画的に取り組んでいる。

【3・4年生】

HRTとALTのやりとりを聞き、内容を推測する。2往復程度のやりとり。既習表現を使って対話する。

【5年生】(インプット中心)

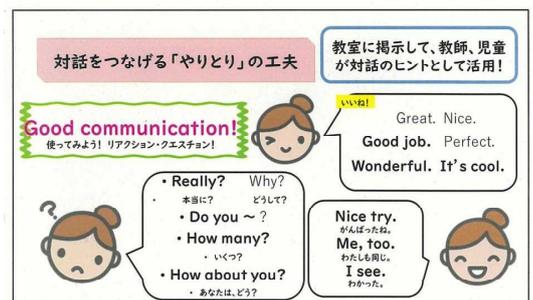
HRTとALTで既習表現等の表現を使って対話し、内容を推測する。HRTやALTと児童で対話をする。疑問文→答え・反応→関連質問→答え・反応

【6年生】(子ども同士のやりとり中心)

HRTとALTで既習表現、使わせたい表現を使って対話し、内容を推測する。その後、HRTやALTと代表の児童で対話をする。最後に児童同士で対話をする。相手を変えて繰り返す。

(4) 課題を達成するコミュニケーション活動の工夫

豊かなコミュニケーションへの一歩として対話をつなげるやりとりの工夫を考えた。相手と思いを伝え合うためには、自己表現と相手意識が必要となる。そのために相手の言葉を繰り返す、リアクション、問いかけなどを工夫していくことにした（資料③）。



【資料③ Good communication掲示】

(5) 「読むこと」から「書くこと」への指導の工夫

中学年はアルファベットの大文字小文字が名称の読みを聞いて分かることを目標に、カードや電子黒板、パズルや歌などで慣れ親しむ活動の工夫を考えた。高学年はアルファベットの大文字小文字が読め、四線上に書き、音声で十分慣れ親しんだ表現を例を参考にし、四線上に書き写す活動を工夫していくことにした。

(6) クラスルームイングリッシュの積極的活用

英語で始まり英語で終わることを目標に、全学年共通したクラスルームイングリッシュを活用する。文科省「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」のシート及び音声 CD を活用し、指導者が英語を話す際に参考にできるようにした。さらに、ALT による毎週 10 分間の英会話レッスンを計画し、授業で使えるクラスルームイングリッシュやゲームのさせ方、日常会話など職員が英語に慣れ親しめる機会を設けている。



【写真① ALTによる英会話レッスン】

(7) ALT との効果的指導の工夫とデジタル教材の活用

ALT との打ち合わせを毎時間必ず行い、学習内容や語彙の数、使わせたい表現、チャンツやゲームなどを決定している。ALT はネイティブスピーカーとして、英語の発音のモデルの役割を担ってもらい、児童の発音や Good communication の態度のよさについて頑張りを褒めるようにしている。



【写真② 発音ポイント】

担任だけの授業の時は、"Let's Watch and Think"や"Let's Listen"などのデジタル教材を積極的に活用し、ALT 以外の英語にも十分に慣れ親しませる機会を設け、デジタル教材のアルファベットジングルやゲームなども授業の導入などで活用することにした。



【写真③ デジタル教材】

3 視点3 「評価の工夫」

(1) 評価場面、評価方法の工夫（資料④）

活動中の常時評価、活動途中の中間評価、終末の自己評価・相互評価を行う。常時評価はコミュニケーションポイント、中間評価は本時で身に付けさせたい力、自己評価・相互評価は児童の達成感や友達とのかかわりを中心に行うことにした。

(2) 振り返りカードによる評価の工夫

児童が学習のめあてに沿って振り返り、自己評価や感想記入ができるようにカードを工夫することにした。このカードは指導者が児童の学習状況等を把握するためと、児童自身が自分の成長を実感できることをねらった。カードには、「ア めあての達成」「イ グッドコミュニケーションポイント」「ウ 日本語と英語の相違点」「エ 学習感想、友達の頑張りの記入欄」を設けることにした。



【資料④ Good communication の掲示】